



自然・ひと・体験

編集：日本野外教育学会広報委員会

発行：日本野外教育学会事務局

〒305-8574 つくば市天王台 1-1-1 筑波大学体育系野外運動研究室内

TEL&FAX. 029-853-6339



スノーシューハイクへ出発

特集 日本野外教育学会第19回大会 案内（第1報）

日本野外教育学会第19回大会のご案内	2～4
野外教育に関する学位論文題目リスト	5～6
支部活性化事業 実施報告	7～12
関連団体情報	12
事務局便り	13～14

日本野外教育学会第19回大会（静岡）のご案内（第1報）

大会実行委員長：平田 裕一（至学館大学）

大会テーマ：これからの野外教育の発展に向けて～ふかめる～

日本野外教育学会では、学会設立20周年となる第20回大会に向けて「これからの野外教育の発展に向けて～ひろげる・ふかめる・まとめて発信する～」という統一テーマのもとで、昨年度の第18回大会から連続して議論を深めて参りました。今年度の第19回大会は、「ひろげる」から「ふかめる」をテーマに、富士山を仰ぎ見る国立中央青少年交流の家（静岡県御殿場市）にて、自然体験活動推進協議会（CONE）の全国フォーラムと同日程で開催いたします。10月は、日本野外教育学会第19回大会、CONE全国フォーラム、AOCC（第6回アジア・オセアニア・キャンプ大会）等、全国規模および国際的な野外教育関連のイベントが連続し、「体験の嵐」が「嵐」となります。本大会が学会員の皆さんとCONE参加団体の皆さんとの交流の場となり、相互の対話を通して「野外教育の理論と実践」の検討を深める機会となれば幸いです。

1. 期日 2016年10月14日（金）～16日（日）

（入浴・休憩）

2. 会場 独立行政法人国立青少年教育振興機構

19:00～ 懇親会

国立中央青少年交流の家

第3日目：10月16日（日）

〒412-0006 静岡県御殿場市中畑2092-5

8:00～ 受付

3. 大会日程（予定）

9:00～10:30 研究発表③

本大会は、学会員とCONE会員がそれぞれの大会のプログラムに相互に参加することができます。【選択プログラムA/B】については、申込後にご希望のプログラムを登録していただきます。

10:30～12:30 企画委員会シンポジウム

（CONE参加者：体験プログラム・分科会③）

（6月中旬頃に詳細をご案内いたします）

（昼食・休憩）

13:00～ 学会・CONE 合同ふりかえりセッション

15:00～ 閉会式

第1日目：10月14日（金）

12:00～ 受付

13:00～ 開会式・オリエンテーション

14:00～ CONE企画 基調講演/パネルディスカッション
テーマ「自然体験活動の効果を探る」

（16:30～ 学会理事会）

17:00～ チェックイン・夕食・入浴

18:30～ 第19回大会企画 基調講演
テーマ「日本『型』野外教育の本質を探る」

20:00～ 交流懇親会

第2日目：10月15日（土）

8:00～ 受付

9:00～10:30 研究発表①

10:30～ **【選択プログラムA】** 体験プログラム・分科会①
（昼食・休憩）13:00～14:30 **【選択プログラムB】** 自主企画シンポジウム
/体験プログラム・分科会②

14:30～16:00 研究発表②

16:00～ ポスターセッション

17:00～ 総会

4. 研究発表・実践報告・自主企画シンポジウム申込方法

研究発表・実践報告・自主企画シンポジウム申込期限

【申込期限】2016年6月10日（金）**【原稿提出期限】2016年7月29日（金）**

*企画・発表者の皆様は、別途9月2日（金）までに、「大会参加申込」と「参加費納入」をお願い致します。

*原則として、第19回大会専用ウェブサイトから申してください（不都合な場合は、大会事務局に問合せください）。

*抄録原稿データは、各々の「抄録原稿提出要領」に従って期限までに提出してください。

☆研究発表・実践報告の注意事項

◆ 発表の資格に関すること

①筆頭者および演者は、正会員、名誉会員、団体会員（一般）、賛助会員、および大会実行委員長が認めた者とする。ただし、非会員であっても外国人研究者に関してはこれを認める。

②共同研究者には、非会員が名前を連ねても差し支えない。

③筆頭者および共同研究者に関して、会員は年会費を期日

までに完納していること。また、非会員は所定の発表投稿料 (3,000 円) を期日までに納付すること。

◆発表の方法等に関すること

- ①原則として未発表の研究に限る。
- ②筆頭の発表 (口頭発表、ポスター発表、実践報告) は1回の大会において1題目に限る。
- ③発表の言語は、日本語あるいは英語とする。
- ④やむをえない理由で演者が発表できなくなった場合、事前に大会実行委員長の承認を得て、共同研究者による代演を認める。

◆抄録原稿に関すること

- ①一度提出した抄録原稿の訂正はしない。
- ②発表された抄録は、学会ウェブサイトに掲載する。

◆その他

- ①本学会が定める倫理規定を順守すること。
- ②以上の発表要件に満たない研究は、発表を取り消す場合がある。

☆自主企画シンポジウムの注意事項

「自主企画シンポジウム」とは、大会に参加する学会員自らが、テーマ、司会者、話題提供者、指定討論者等を設定して実施されるシンポジウムです。様々な視点や立場からの実施を募集しております。なお、大会実行委員会は、内容重複の調整や実施可否の判断等させていただきますので、あらかじめご了承ください。

5. 大会参加申込方法

第19回大会専用ウェブサイトにて申込をされた上で、参加費等を納入してください。ウェブサイトでの申込が不都合な方は、大会事務局にお問い合わせください。

2日目の選択プログラムは先着順での参加決定となりますので、早めの申込みをお願い致します。

【大会参加申込の受付期間】

2016年7月1日(金)～9月2日(金)

6. 第19回大会専用ウェブサイト

各種申込や原稿提出は、下記URLから行ってください。
<http://joes.gr.jp/gotenba2016/>

7. 大会事務局・問い合わせ先

〒420-0911 静岡市葵区瀬名 2-2-1

常葉大学短期大学部保育科 遠藤知里研究室

日本野外教育学会第19回大会事務局 (遠藤知里)

TEL: 054-261-1313 (常葉大学短期大学部 代表)※

090-1542-7279 (事務局 遠藤知里)※

FAX: 054-333-5408 (遠藤知里研究室)

※ 研究室直通の電話がありません。大変恐れ入りますが、連絡先を明記のうえ、できるだけE-mailかFAXでお問い合わせください。折り返しご連絡差し上げます。

E-mail: 19th@joes.gr.jp

参加費と納入方法

①参加費 (大会参加費+研究発表抄録集代)

	事前納入	当日納入
正会員(一般)	5,000円	6,000円
正会員(学生)	3,000円	3,000円
団体会員	5,000円	6,000円
	1日のみ参加	2日間/3日間参加
非会員(一般)	4,000円	6,000円
非会員(学生)	3,000円	4,000円

*非会員の参加費は事前納入・当日納入とも同額です。

*国立中央青少年交流の家での宿泊と食事を希望される方は必ず事前申請してください。宿泊代(シーツ代)・食事代等は、大会専用ウェブサイトをご確認ください。
*抄録集のみの購入(2,000円)も可能です。

②懇親会費 (2日目)

	事前納入	当日納入
正会員(一般)・団体会員	3,000円	4,000円
・非会員(一般/学生)		
正会員(学生)	2,000円	3,000円

③大会参加費等の納入方法

同封の振込用紙を用いて、下記口座に振込みください。

9月2日(金)までに納入確認できない場合、当日参加料金をいただきます。また、一旦納入された参加費等の返金はいたしません。

振込先 郵便振替口座

口座記号番号: 00830-1-136425

口座名称 日本野外教育学会第19回大会実行委員会

<他の金融機関から振込みの場合>

ゆうちょ銀行 ○八九(ゼロハチキユウ)店 (089)

当座 口座番号: 0136425

④その他の費用 (当日集金させていただくもの)

- ・第1日目の交流懇親会は、会場に各種飲み物等をご用意いたします(当日清算・現金をご持参ください)。
- ・第2日目の分科会は、別途費用が必要なものがあります(事前資料で金額をお知らせし、当日集金いたします)。

研究発表（口頭発表・ポスター発表） 抄録原稿提出要領

第19回大会専用ウェブサイトから、「研究発表抄録原稿フォーマット」をダウンロードして使用してください。

1. 原稿枚数：口頭発表はA4版2頁、ポスター発表はA4版1項とします。原稿は、白紙を縦置きにし、天地左右に25mmの余白を設定し、ワードプロセッサ等で作成してください。
2. 演題：(14ポイント・ゴシック体) 演題は1行目（必要があれば2行目まで可）に、副題がある場合は改行してそれを記載して下さい。また、演題（あるいは副題）の下の行に、英文タイトルを記載して下さい。
3. 氏名：(12ポイント・明朝体) 英文タイトルの下に1行空白を設け、その下の行に氏名と（ ）内に所属を記載して下さい。また、共同研究者も同様に連記し、演者氏名の前に○印をつけて下さい。
4. キーワード：(10ポイント・明朝体) 氏名の下に1行空白を設け、その下に発表内容のキーワード（2～5個）を記載して下さい。（例）キーワード：○○○○、○○○○、○○○○
5. 本文：(10ポイント・明朝体) キーワードの下に1行空白を設け、その下から本文を記載して下さい。本文は、1行あたり20～22文字の2段組とし、1頁の行数は、演題の行を含め40行程度とします。
6. 図・表および写真：図・表および写真は、原稿に直接挿入し、「通し番号」と「見出し」をつけてください。
7. 提出方法：原則として、大会専用ウェブサイトから、PDF形式の原稿データを提出してください。なお、原稿の校正は行わず、そのままオフセット印刷で抄録集に記載します。
8. 原稿締切：**2016年7月29日（金）必着**
9. その他：上記の提出要領に沿わない原稿は受け付けません。なお、上記以外に「野外運動データベース（ROP）」登録上必要な情報を提供していただく場合がありますので、ご協力をお願いいたします。

実践報告 抄録原稿提出要領

抄録集に実践報告の概要を掲載しますので、以下に従い原稿を提出してください。

1. 原稿内容
 - ・「演題」、「英文タイトル」、「氏名と所属」、「概要（300字以内）」を作成して下さい。大会実行委員会で編集し、抄録集に掲載します。
 - ・演者氏名の前に○印をつけて下さい。
2. 提出方法
 - ・原則として、大会専用ウェブサイトから原稿内容を提出して下さい。
 - ・原稿締切は、**2016年7月29日（金）必着**です。
3. 発表方法
 - ・当日の発表は、研究発表（ポスター発表）に準じた形式となります。

自主企画シンポジウム 抄録原稿提出要領

抄録集に自主企画シンポジウムの紹介文を掲載しますので、以下に従い原稿を提出してください。

1. 原稿内容
 - ・「シンポジウムテーマ」、「テーマの英文」、「企画担当者（役割も含めて）」、「企画の趣旨（400～800字程度）」を作成して下さい。
 - ・企画担当者については、氏名の後に（ ）を記し所属を記入して下さい。また、役割については、企画者、コーディネーター、話題提供者、指定討論者など、ご自由に設定して下さい。
2. 提出方法
 - ・原則として、大会専用ウェブサイトから原稿内容を提出して下さい。
 - ・原稿締切は、**2016年7月29日（金）必着**です。
3. 留意事項
 - ・申込多数やテーマが重なった場合は、大会事務局で調整の上、6月下旬に申込者に決定連絡する予定です。
 - ・テーマや趣旨が本学会の趣旨と著しく異なっていたり、事前の申込内容と著しく違う場合などは、実行委員会の判断で企画を取りやめていただく場合がありますので、十分にご留意ください。
 - ・原稿提出後に、企画内容・場所・機材等について、申込者にメール等で連絡調整をする予定です。

2015年度 野外教育に関する学位論文題目リスト

日本野外教育学会広報委員会は、会員のみなさまにご協力いただき、国内の大学の学部生・大学院生が今年度執筆した野外教育に関する学位論文（博士論文、修士論文、学士論文）の題目情報を収集し、題目リストを作成しました。会員のみなさまの情報交換や研究の動向把握などにご活用ください。

- ・本リストは日本国内で執筆された野外教育に関するすべての学位論文の題目情報は網羅していません。2016年2月末までに会員の方々から提供していただいた情報をもとに作成しています。
- ・執筆者本人の許諾を得て、指導教員が野外教育に関係する内容であると判断した題目を掲載しています。

博士論文

学生氏名	論文題目	学科・専攻名	指導教員名
東京海洋大学大学院 海洋科学技術研究科 博士(海洋科学)			
松本 秀夫	海洋性スポーツ・レクリエーションにおける専門志向化と主観的幸福感・レジャー満足度に関する研究	応用環境システム学専攻	千足 耕一

修士論文

学生氏名	論文題目	学科・専攻名	指導教員名
筑波大学大学院 人間総合科学研究科			
大友 あかね	長期キャンプにおける課題を抱える児童生徒の本来感に関する研究 ～児童生徒は自分らしさをどのように表現するのか～	体育学専攻	坂本 昭裕
東京学芸大学大学院 教育学研究科			
紀 晃太	自然体験活動における補助指導員の役割に関する質的研究 ～私立小学校の雪上野外活動をモデルにしたケース・スタディ～	保健体育専攻 体育学コース	小森 伸一
信州大学大学院 教育学研究科			
小松 直紀	キャンプ実習が大学1年生の大学適応感に与える影響	教科教育専攻 保健体育専修	平野 吉直

学士論文

学生氏名	論文題目	学科・専攻名	指導教員名
北海道教育大学 教育学部岩見沢校			
朝倉 奏子	雨を直接体験するアクティビティの考案	スポーツ教育コース アウトドア・ライフ専攻	能條 歩
中本 貴規	自然との距離を縮めるプログラムによる建設的コミュニケーション力の育成		
大友 那都紀	学校保健授業として扱えるキャンプ・プログラム案作成について		
佐藤 泉	目的別登山における環境配慮行動の調査		濱谷 弘志
大津 あゆみ	屋久島登山者における環境配慮意識の調査		
本間 翔馬	民間団体における自然の活用度に関する調査		
木上 陽介	リバーカヤックの継続を規定する要因	山田 亮	
峯村 明希	自然体験活動の指導経験が人生に及ぼす影響		
仙台大学 体育学部			
堀松 雅博	大学生の登山におけるモチベーションの変容とその要因	体育学科	岡田 成弘
松田 涼	大学キャンプ実習におけるキャンプカウンセラーのスキルが参加者からの信頼感に及ぼす効果		
筑波大学 体育専門学群			
大関 久仁	森のようちえん活動が幼児の運動能力に与える影響	健康・スポーツ マネジメント専攻	渡邊 仁
吉沢 直	冒険教育としてのソロプログラムの構造～不安変化と内省プロセスの解明～		
西島 隆成	スキー・スノーボード滑走時のフロー体験について	健康・スポーツ教育	坂本 昭裕
北翔大学 生涯スポーツ学部			
秋吉 翔太	野外炊事の安全教育が参加者の危険認知能力の向上に及ぼす効果	スポーツ教育学科	青木 康太郎
石塚 桜子			
長内 智弘			
東京学芸大学 教育学部			
栗原 幹	大学サッカー部員のポジティブ値の変容と日常生活 およびプレーパフォーマンスへの影響についての質的研究～幸福度を向上させるアクティビティの実践を通して～	健康スポーツ科学講座	小森 伸一
横手 尊弘	組織キャンプにおける直接的コミュニケーションが及ぼす肯定的な認識についての質的研究 ～ネット依存傾向「中」レベルにある大学生を対象としたケース・スタディ～		
安松 和哉	登山活動によるポジティブ値の変容とその要因についての一考察 ～教育系大学の大学生を対象とした ケース・スタディ～		
吉原 稔	人はなぜ山を走るのか～トレイルランナー及び志望者を対象としたライフストーリー研究～		
齊藤 傑	幸福指数の変化による運動パフォーマンスへの影響についてのケーススタディ ～バスケットボールサークル所属の大学生を対象として～		
信州大学 教育学部			
永坂 加奈子	キャンプに参加した子どもに対する保護者の見方や接し方の変化	生涯スポーツ課程 野外教育コース	平野 吉直
小林 奈津美	国立公園における利用調整地区の実態～知床五湖地区、西大台地区の2事例から～		
石井 貴大	自然体験が自然音に対する感じ方に及ぼす影響		
長田 直人	自転車の旅の魅力に関する研究		
田中 洋典	歴史や文化に関する知識が及ぼす登山の効果		
尾形 祐介	スキー場のグリーン期における営業の現状と課題		
両角 あずさ	大学生の発達資産が生きる力に及ぼす影響		
東京海洋大学 海洋科学部			
杉林 正晟	市販される呼吸筋トレーニング機器が呼吸機能に及ぼす影響	海洋政策文化学科	千足 耕一
平 尚起	スクーバダイバーの健康管理に関する調査研究		

学生氏名	論文題目	学科・専攻名	指導教員名
大東文化大学 スポーツ・健康科学部			
榎本 悠斗	障害者キャンプ初参加スタッフの意識変化について	スポーツ科学科	中村 正雄
山形 実和	冒険教育におけるふりかえりのあり方		
至学館大学 健康科学部			
伊藤 清高	NPO法人再非行防止サポートセンター愛知の活動と課題について	健康スポーツ科学科	平田 裕一
伊藤 紀貴	集団宿泊体験学習における事前準備の重要性について		
稲葉 百香	公営プールの現状と課題について		
川北 葵	自然体験活動における携帯電話の有用性		
戸澤 拓哉	野外活動スタッフに必要なソフトスキル		
東 美佳	幼児キャンプ参加者の保護者の期待と不安について		
丸山 詩織	山村留学生による地域児童への影響について		
三井 梨那	野外活動における対人関係の意識について		
若松 龍之介	ヨコノリススポーツ3種目による比較		
びわこ成蹊スポーツ大学 スポーツ学部			
戸田 耕介	キャンプ指導経験が大学生の仮想的有能感に及ぼす影響	生涯スポーツ学科 野外スポーツコース	清水 史郎 中野 友博 黒澤 毅 林 綾子
池上 雄星	ASE を体験した小学生の言語的サッカーコミュニケーションに関する研究		
井関 湧大	スクーバダイビング前後の自然認識の変化について～座麻味レクリエーションダイバーを対象として～		
井上 大河	過去の自然体験が大学生の環境配慮公道に及ぼす影響		
上田 怜奈	アウトドア用品と購買決定要因		
岡田 華奈	ファミリーキャンプが親子関係に及ぼす影響		
尾野 健太	長期キャンプ体験におけるネット依存者の社会的自己制御に関する研究		
鎌田 芽衣	野外活動を取り入れた婚活の現状と課題について		
小林 みなも	シニアキャンプが参加者の生きがい感に与える影響		
佐藤 匠馬	キャンプ実習が高校生の信頼感に及ぼす影響～カウンセラーの関わりに着目して～		
住友 真奈美	琵琶湖遠泳での自己効力感の習得～専心性について着目して～		
瀬崎 圭	ヨット初心者の技術習得度に関する研究～小学生と大学生を比較して～		
常深 真由	ダイビング経験が大学生の環境保全意識に及ぼす影響		
遠矢 貴大	遠泳活動を含む水辺実習が学生の自己効力感に及ぼす影響～泳力差に着目して～		
富田 桜	自然体験活動を取り入れた保養プログラムに関する研究～保護者の期待と子どもの変化に着目して～		
中岡 美咲	集団宿泊体験が学童保育児童のコミュニケーション・スキルに及ぼす影響		
野呂 修平	ASEが大学硬式野球部員の目標指向性に与える影響		
畑尻 有花	フリースタイルスノーボーダーのリスクテイキング行動に関する研究 ～刺激欲求特性と楽観性との関連に着目して～		
林 祐太郎	陸上競技リレーにおけるASEの体験の有効性		
樋高 喜大	長期キャンプに参加した小学生の親和動機の変容について～奄美大島サマーキャンプを事例として～		
松井 大喜	キャンプを取り入れた新入生宿泊研修に参加した女子高生の自尊感情の変容 ～自己評価・他者評価の観点から～		
三船 有紀	キャンプスタッフ経験が大学生の社会基礎力に及ぼす影響		
村尾 亮汰	富士登山におけるトレッキングポール使用の現状～個人属性に着目して～		
森島 太	キャンプ指導体験がカウンセラーのコーピングスキルに及ぼす影響～ストレスラーとの関連に着目して～		
山本 龍馬	琵琶湖での遠泳体験が参加学生の感情と特性不安に与える影響～特に遠泳前後の変化から～		
余 佩葵	台湾小学校の野外教育の現状 台東県緑島公館小学校の場合 (2014年度)		
京都教育大学 教育学部			
脇谷 風太	スキー実習が大学生の自尊感情に及ぼす影響	体育領域専攻	遠藤 浩
大阪国際大学 人間科学部			
大森 望	アウトドアスポーツの普及と発展～レースラフティングの現状と課題に着目して～	スポーツ行動学科	横山 誠
席田 味奈	サマースクール参加者及び学生ボランティアの態度の変容について		
鹿児島大学 教育学部			
床次 泰至	大学キャンプ実習における信頼感の変容と要因に関する研究	健康教育コース	福満 博隆
中村 亮介	大学キャンプ実習における自己肯定感の変容とその要因に関する研究		
柳村 大基	子どもキャンプにおける自己効力感の変容と変容に影響するアクティビティに関する研究		
福岡大学 スポーツ科学部			
大内 康平	大学キャンプ実習による無気力感と孤独感の変化	健康運動科学科	築山 泰典
城崎 綾花	キャンプ実習がコミュニケーション能力育成に及ぼす影響		
高草木 直	キャンプカウンセラーのリーダーシップ特性が参加者に及ぼす影響		
平田 優	キャンプ実習における登山経験がその認知に及ぼす影響		
山崎 遥香	大学生キャンプ実習で身につく能力の検討・予測力を育てることは可能か		
木戸 雄太	キャンプ実習における登山がリーダーシップの育成に及ぼす影響	スポーツ科学科	
田久保 磨林	PAプログラム体験による思考スタイルとストレス状態の変化		
山下 あずさ	PAプログラム体験によるストレス認知の変化		
名桜大学 人間健康学部			
原田 葉	沖縄県の特性を生かした体験学習初年次教育効果について	スポーツ健康学科	遠矢 英憲
後藤 有紗	プールでのスノーケリングを用いた指導が水泳に対する態度と泳力に与える効果		
鹿島 良悟	大学入学後の学生のボランティア活動経験とライフスキルの関係性～スポーツ健康学科所属学生に着目して～		
大村 伸之介	カヌースプリント競技に対する魅力認知の個人別構造～競技レベルの違いによる比較検討～		
島袋 健耶	青年会活動が団員の社会性に及ぼす影響について～沖縄県本部町渡久地青年会を対象にして～		
島袋 紗織	不登校児童生徒の自尊感情へ影響を与える自然体験プログラムについて～自己評価および他者からの検討～		
木村 一葉	スノーケリングを利用した指導が中学生の水泳学習場面での有能感と不安感に与える効果について		

北海道・東北ブロック 支部活性化事業 実施報告

山田 亮 (北海道教育大学岩見沢校)

「北海道アウトドアフォーラム 2015」

テーマ：「自然 教育 観光 立場を超えたつながりが新たな価値を生み出す」

日時：2015年11月5日(木)～6日(金)

場所：国立日高青少年自然の家

参加者：147名(内、学会員及びその関係者：21名)

2015年5月に、北海道のアウトドア事業者、野外教育の研究者、社会教育行政、青少年教育施設の関係者による情報交換会が開かれ、北海道のアウトドア業界の現状と課題、今後の発展可能性について話し合わせ、教育や観光など立場を超えて情報交換やネットワークづくりができる機会をつくりたいという結論に至りました。そして、当時、北翔大学に勤務されていた青木康太郎氏(現、国立青少年教育振興機構)と私が呼びかけ人となり、6月に準備会を開催し、本学会の評議員の久保田康雄氏(国立日高青少年自然の家所長)を実行委員長とする北海道アウトドアフォーラム2015実行委員会が組織され、11月の開催につながりました。以上の経緯から、野外教育学会の会員のみならずにも積極的にご参加いただきたいという希望と、実行委員会からの要望もあり、本フォーラムへの参加を、日本野外教育学会北海道・東北ブロック支部活性化事業として実施させていただくこととしました。

1日目は、基調講演として「自然資源を活かした観光まちづくりの可能性」をテーマに、当時、北海道大学観光学高等研究センター教授の敷田麻実氏(現、北陸先端科学技術大学院大学教授)にご講演いただきました。これまでに北海道庁による北の観光リーダー養成事業座長や北海道アウトドアガイド資格検討委員会委員長を歴任されてこられた敷田氏から、エコツアーやそれに関わる人材育成、自然環境が豊富な地域のマネジメントに関する理論的背景、知床やニセコなどの北海道内観光地の成功事例など、詳しく解説いただき、北海道のアウトドアと観光の発展の可能性についてご示唆いただきました。

次に、「先人」プレゼンテーションというアウトドアにおける各分野の第一線で活躍する方々8名による発表がありました。プレゼンテーションのキーワードは、①施設、②企画、③経営、④協同、⑤キャンプ、⑥研究、⑦地域、⑧福祉があり、プレゼンテーションの後には、それぞれのテーマに分かれてのトークセッション行われ、参加者のみなさんは自身が興

味をもったテーマのセッションに参加し、それぞれ活発なディスカッションが繰り返されていました。

2日目は、連携、企画、安全というそれぞれのテーマに沿ったディスカッションが主となる創造型ワークショップと観光、乗馬、写真という北海道ならではのアウトドアプログラムをテーマする体験型ワークショップに分かれ、参加者が主体となって北海道における今後のアウトドアの可能性を探っていく機会となりました。

今回のフォーラムは、実行委員会が当初予想していた参加者数をはるかに上回る約150名にご参加いただき、北海道のアウトドア関係者にとって、大変有意義な情報交換の場、ネットワークづくりの場となっただけではなく、北海道のアウトドア業界のムーブメントになったのではないのでしょうか。私の個人的な成果となりますが、民間、施設、行政で行われているプログラムの実態を把握することができたり、初めてお目にかかる方々との情報交換によって、大学授業のインターンシップ実習の受け入れ先や学生のアウトドア業界の就職先の開拓ができたり、大学と民間団体との共同研究のアイデアが生まれたりなど、今後につながる大きな成果を得ることができました。

2016年度のフォーラム実施について、現在、開催日程について検討しているところです。関西野外活動ミーティングや九州キャンプミーティングのように継続的に実施していきたいと強く望んでいます。引き続き、学会員のみならずにはご協力をいただきますよう、よろしくお願いたします。また、広範囲の地域となりますが、北海道地区と東北地区の融合も積極的に検討していきたいと考えております。最後になりましたが、長距離移動で日高までお越しいただいた北海道の学会員のみならず、群馬や大阪から空路でお越しいただいた学会員の方々、お忙しい中ご参加いただきありがとうございました。みなさまのご協力のおかげで、充実した支部活性化事業となりました。心から感謝申し上げます。

関東ブロック 支部活性化事業 実施報告

多田 聡 (明治大学)

【テーマ】「自然を観る：森林分野と沿岸域分野から」

【日時】 2015年11月8日(日) 15時00分～18時00分

【場所】 東京海洋大学越中島キャンパス寮地区 85周年記念会館大集会室

【参加者】 15名(学会員12名、一般参加者3名、演者を含む)

「自然を観る」をテーマとして、千葉県館山市で活躍中のプロ・カヤックガイド藤田健一郎氏から「沿岸域における自然観察」を、本学会理事で森林総合研究所多摩森林科学園の大石康彦氏からは「森林における自然観察」について、両氏が専門とするフィールドにおいて自然をどのように観ているのか、自然観察の実際についてお話しいただきました。

1. 「南房総をカヤッカーの視点で見る」(要旨)

藤田 健一郎 氏

生物や海は好きだったが、元々生物学を勉強していたわけではなく、カヤックツアーガイドを行っている中で興味を持ち観察を始めた。1998年当時南房総に定着した6頭のミナミバンドウイルカの観察が、最初の野生動物調査であった。よくあるイルカウォッチングでは、イルカを追い回している印象だが、カヤックはイルカに圧力をかけないので観察に適していると感じた。そこでまず6頭のイルカを見分けるために背びれの撮影を行い、個体の判別を始めた。そのうちロールで下向き状態での撮影も取り入れ、胴体のマークや性別の判別も行った。こうした観察を元に識別表を作成し、他の地域での識別表と比較したところ、御蔵島の識別表にも南房総のイルカがいることがわかった。これによりイルカの移動範囲を知ることに繋がっていった。

このイルカ調査をきっかけに徐々に周りの環境にも関心が出てきたときに、砂浜でウミガメの足跡を発見した。その浜ではまだ誰も調査していない様子だったので、客観的な記録を残そうと考えた。観察を始めると山に登っていく子ガメを発見したり、護岸により産卵場所まで到達できないケースや産卵場所が近くなりすぎることがわかってきた。山に上がっていく子ガメは、街灯によって影響を受けていることがわかり、沿岸の街頭を赤い光に変えてもらう運動もした。浜に打ち上げられた鳥、クジラ、イルカ、カメといった生物の調査作業である「ストランディング」の記録もったり、カヤックを使って沿岸に迷い込んでしまうイルカの

追い出しを手伝うこともある。

現在はこのような活動を通じて植物や昆虫などにも興味が広がっており、本業であるカヤックガイドにも大きく役立っており、現場にフィードバックしていくことを考えている。
藤田氏WEBサイト「シックスドールズカヤックサービス」
<http://6dorsals.com/index.htm>

2. 「森林における自然観察」(要旨)

大石 康彦 氏

はじめに我が国における森林について、国土の67%を森林が占めており、南北に長い多様な多様であること、加えてその割合が長年の間減っていないということなどの特徴が示された。また、森林の持つ多面的な機能、数百年という単位での森林の持続性、そして森林体験活動の場としての可能性について話が進められた。

森林における自然観察については、その対象とその方法についてまとめて報告された。対象として、1)特定の生物種の観察(例：キノコの観察会)、2)特定地点の環境観察(例：源流探索)、3)フィールドに埋め込まれた様々(例：ガイドウォーク)という3つを例に説明した。

また、方法としては、1)ルーペなどを使った細部の形状の観察、2)盲学校での遠足の例から触覚を使った形状や質感の観察、3)体験型ゲーム「森の詩」を例に五感で感じ取る観察、4)沢登りを例に運動による体感を使った観察、5)ゲーム「森のファッションショー」を例に創作による観察、6)間伐体験のような作業による観察などを紹介した。

このように、従来のように、あるいは狭義に自然観察をとらえるならば、キノコの観察会のようにルーペを使って細部を調べるような観察になるが、体験活動として観察する場合には、単に観るだけではなく、五感を通して、あるいは活動そのものを全身で体験することで感じ取る(体感する)ことも観察なのではないかという問いかけがあった。

3. ディスカッションから

一人ひとり意見を述べたり、質問したり、活発にディスカッションが行われました。

「(モノの名前や性質を知るような) 従来の観察と感覚的な観察とどの程度、線を引くのか。カヤックをしていると自然に感覚的な体験(体感)から観察が始まるように思う。」

「キノコの観察などでは、だいたい観察するポイントが決まっているような活動になる。観察の範囲が狭く、周りが見えない場合がある。このあたりが問題なのではないか。」

「藤田さんが、なぜイルカから他の対象にまで広がっていったのかが不思議である。特定の対象に固執しがちになる場合が多い。」

藤田→「知り合いの先生から、対象だけ見ているでも何も見えない。周りを見ることも必要である、と教えられ影響を受けた。今は広がりすぎて手が回らないということもある。」

「大石さんの自然観察という定義の広がりや、自然体験と言いつい換えても良いのかと思った。観るという言葉を使うと狭くなる。観察の観を感じるという語で使ってる人はいないかと思った。」

「研究者というよりは、博学者としてのモデルをみたような気がした。」

「専門家や職業、政治家など色々な立場の方と関わっているが、そのような人と繋がっていることが役に立っているか。」

藤田→「私のような変わった人間を受け入れてくれる方と繋がっていくという感じ。」

「地元の人たちは、海との関わりが少なくなっているというがどのような状況か。」

藤田→「若い漁師さんはいない。どんどん減っている。」「漁師になれ、といわれる。」「一般の人が浜に足を運ぶことがほとんどない。」「住んでいる子ども達を対象にもしたいが、なかなか来ない。集まらない。」

「山に住んでいるが、親の世代が山にも連れて行けないし、里山・裏山での活動もできない。移住してきた人の方が、意識が高いかもしれない。」「自然に目を向けるような生活スタイルではなくなっている。」

「自分はいつも親に海に連れられていった経験がある。当時は何もなかったからできたが、今の子ども達はゲームをしたり、遊びが変わっている。」

「地域の博物館などに行って自然のジオラマなどを観察することは自然観察になるのか。」

「水族館でイルカを眺めるのが好きだが、自然観察としてどうか。」

「見えなかったモノが見えるようになるという感覚が自然観察。見方を教えてくれる人がいることが大切。」

「観察というと結果が出ることと思っていたが、自然が対象になると結果が出ないこともあるということに気づいた。」

「自然観察をしていると、すぐ先生に聞いてくるが、専門家である先生が分からないというところが驚く。世の中のことはすべて分かっていると思っている。例えば、ガイドがキノコの説明をしていると、その横で、スマホで調べている参加者がいる。それで分かったと思っている。分かり方が大切。」

4. 企画担当者の感想

夏場もほとんど海に出ることがない私にとって、藤田さんから沿岸地域での観察の実際を聞くことで大変刺激を受けました。自然観察というよりは、調査の域に達しており素晴らしい成果を残されています。藤田さんの真っ黒なお顔から察するに、日々海とともに暮らしている様子が伝わってきました。単発のプログラムではなく、四季にわたって、あるいは経年の変化、異なった地域での観察など、変化や比較することが大切だと感じました。繰り返し関わる中で気づくことこそが大切なのではないでしょうか。

大石さんの「体験的観察」のお話からの野外教育としての意義を改めて考える機会を得ました。分かり方が重要という指摘がありましたが、このことは野外教育にとってコアになる部分なのではないかと思いました。

5. 参加学生の感想

藤田さんのお話を聞いて道を照らす街灯の影響などでウミガメが孵化してから海とは反対の方向に進んでしまっているという話が印象的でした。人間が自分たちの利便性だけを追及しているためだと感じました。

大石さんのお話では、自然のものを使つてのファッションショーなど普段感じるできないものを感じる、体を動かしてからだ全部で感じることも観察だと数値にすることができない観察のすばらしさに気づくことができました。

お二人のお話を聞いて思ったことは、もっと人間は自然に入らないといけないということです。自然に入って観察もしたことがない遊んだことがない人が新しいものをこれから作ったりするときは、自然のことなどまったく考えることはないはず。これから先何百年、何千年と生き物、自然を守るためにこれからの社会を作っていく若者こそ自然に入るべきだと私は考えます。

野原 啓 (明治大学法学部4年生)

私は海のない長野県で高校生まで育つたため、海に対しては憧れのようなものがあります。藤田さんはカヤックに乗ってカヤック自体を楽しむことはもちろん、身の回りの自然、

生物の観察を広い視点から見ていて、その様子からは「好きだから」やっているという姿勢が感じられ、自分も興味のあるもの、好奇心がくすぐられるものを深めてみたい、と思いました。また2年ほど前、利島で「ドルフィンスイム」(ウェットスーツ、足ひれ、シュノーケルを着けイルカと泳ぐ)を体験しました。確かにその当時は一緒に戯れている気分でしたが、藤田さんのお話を聞きモーターボートで追い掛け回していたのかもしれない、とハッとしました。

大石さんの森林での活動のお話からは、どれだけ身の回りの自然と触れ合ってきたか、私自身思い返すことができました

た。確かに「観察」となるとインストラクターの指示に従って周りを見ることだけしかできていなかった気がします。森林の中に放り出され初めて五感で感じる体験というのは案外今の子供たちは経験しづらくなっているのではないかと思います。「自然観察」という言葉にするとなんだか目的や理由をしっかりと定めないといけない気がします、藤田さんのように好きなものに情熱を注ぐことや、大石さんのように周りを「感じる」活動は今なかなか出来ないことだと分かりました。

関 萌季 (明治大学法学部4年生)

中部・甲信越ブロック 支部活性化事業 実施報告

遠藤 知里 (常葉大学短期大学部)

「第5回中部・甲信越ブロックミーティング」

テーマ：「実践で私が大切にしたいこと」

日時：2015年12月5日(土)～6日(日)

場所：国立中央青少年交流の家

参加者：学会員14名、一般参加者5名(社会人1名、学部学生4名) 計19名

1日目は、『生』を活かす・自然と狩猟と私の生活』をテーマに、富士宮市で自然学校「森のたね」を主宰している猟師の井戸直樹さんにお話を伺いました。また、伊豆で狩猟を行っている伊藤愛さん、伊豆・天城に暮らす森嶋康代さんにも、体験談を話していただきました。シカの皮革を用いて生活の中で実際に使えるもの(コインケース)を作る体験、シカ肉を使った料理(鹿カレーまん)を味わう体験を通して、自然から頂戴した命を活かす(自らの生活に具体的に取り入れていく)という営みを理解することができました。自然と折り合う生活そのものが「実践」で、それをさまざまな方法で伝えることも「実践」であるという話が強く印象に残りました。

2日目は、ひとりひとりが「実践で大切にしたいこと」を考えるワークを行いました。はじめの話題提供で、森のたねの井戸直樹さんからは「実践しながら伝える」、信州アウト

ドアプロジェクトの鎌水愛さんからは「(生き物・地域の人・子ども同士の)触れ合い」、国立立山青少年自然の家の福富優さんからは「キャンパーズファースト」と、大切にしたいことがクリアに示されました。その後、3つのグループに分かれて、「大切にしたいこと」を語り合いながら考えを深めていきました。最後のシェアリングで印象に残ったのは「同じ山を見てもひとりひとり考えていることが違うという状況が素晴らしい」という言葉です。「違うという状況が素晴らしい」という言葉に、個を尊重すると同時に全体のありかたに意味を見出すという多元的な価値観が、私たちにとっての野外教育の意味の根底を支えていることを再認識しました。

最後になりましたが、参加者の皆様のご協力により、今年度も笑顔があふれる楽しく充実したブロックミーティングを行うことができました。心から感謝申し上げます。



九州・沖縄ブロック 支部活性化事業 実施報告

橋本 和俊 (福岡大学)

「九州キャンプミーティング 2016」

日 時：2016年2月20日(土)～21日(日)

場 所：鹿児島県立霧島自然ふれあいセンター

参加者：39名(内、学会員及びその関係者：5名)

九州各地からの参加者が鹿児島の地に集い、今回で6回目の九州でのキャンプミーティングが開催されました。

初日は、浜本奈鼓氏の基調講演にて幕を開けました。浜本氏は、現在「くすの木自然館」の代表理事を務め、環境教育の立場から調査・研究・教育・環境保全について実践、活躍をされています。同氏からは、四季のある日本独自の気候から生まれる森の成り立ちや仕組み、山の役割について報告されました。さらに、人工林ではない原生林が多く残る鹿児島県の森や風土、独自の気候を紹介されました。特に、九州を代表する原生林が残る屋久島の森の生態系について、その独自性を紹介されました。次に、著書「森は海の恋人(畠山重篤 著)」を紹介され、森と海の恩恵を「人」がいただいていることを例に挙げ、森・海そして人が繋がっていることが紹介されました。しかしその恩恵(利益)を受けるため日本の企業が海外諸国の森林を伐採し、森の生態系を壊すことで、結果的に住民の生活を脅かしていることを浜本氏自身の研究や経験、海外での実地調査での出来事を神妙に語られました。かつて杜の民であった我々の森やその環境について一度考えさせられる基調講演でした。

その後、2つの研究発表と4つの実践発表が行われました。研究発表では鹿児島大学の澤田大基氏により「子どもキャンプにおける自己効力感の変容と変容に影響するアクティビティに関する研究」が発表され、次いで同大学の中村亮介氏により「大学キャンプ実習における自己肯定感とその要因に関する研究」についての発表がありました。

実践発表では、はじめに鹿児島県野外活動カウンセラー協会の緒方大樹氏は、学生を中心とし、長い歴史を持つ同協会の

活動について報告されました。次に、野の花保育園の知花美和氏は保育園での野外活動の実践を報告されました。沖縄特有の文化や海での活動を写真にて紹介され「子どもの目の輝きを感じる」ことをキーワードで紹介されました。今後は保護者と一緒に野外を体験することで、子育ての楽しさに気づいてもらうという、今後に向けての話がありました。3つ目の発表では、北九州キャンプ協会の木村健児氏が、YOU・遊・子どもキャンプの活動とその協会の特徴を紹介されました。キャンプを実践する際に、チラシを掲示・配布する前に口コミで予約がいっぱいになるという話が印象的でした。おわりに、熊本 YMCA の久保誠治氏により防災教育とキャンプの取り組みについて報告され、活発な議論や意見交換が行われ初日の幕が閉じられました。

2日目は、「お持ち帰りキャンプスキル～グループワークを高めるゲーム編～」を花田道子氏(九州共立大学)、築山泰典氏(福岡大学)、西昌平氏(鹿児島県ボーイスカウト)、福島康彦氏(鹿児島県キャンプ協会)の4名の方に実践していただきました。準備物なしでその場でできるものや、フラフープを用いたもの、ロープワークを活用したもの、絵本の切り抜きを活用しそれを全員で物語を完成させるものなど、1人では達成できず、かつ参加者間のコミュニケーションや協働を促すものが紹介されました。使用する道具も簡便であり、企画通りのお持ち帰りには最適なものばかりでした。

以上、九州キャンプミーティング 2016 の報告でしたが、九州というフィールドの魅力や独自性、自然との共生のあり方というものを再確認させられる大会であったと感じました。

近畿ブロック 支部活性化事業 実施報告

中野 友博 (びわこ成蹊スポーツ大学)

「関西野外活動ミーティング2016」

テーマ：『人をつなぐ 地域をつなぐ キャンプの力』～被災地の復旧・復興に果たす視点から～

日時：2016年2月28日(日) 10:30～20:00

場所：大阪府立男女共同参画・青少年センター（ドーンセンター）

参加者：95名（一般52名、学生43名）

関西で年度末の恒例の「関西野外活動ミーティング2016」が大阪市ドーンセンターで開催されました。今年度で15回目の開催でした。

今年度はテーマを『人をつなぐ 地域をつなぐ キャンプの力』～被災地の復旧・復興に果たす視点から～と決め、キャンプの力を再発見、再確認してみようとシンポジウムが計画されました。災害発生直後のキャンプや自然体験活動指導者の関わり実践の観点から元盛岡YMCA宮古ボランティアセンター長の池田勝一氏、災害発生後の取り組み・被災地以外の場所での被災者支援の事例から桃山学院大学の石田易司氏、震災や災害が発生する前にその対策としての防災の観点から兵庫県立大学大学院緑環境景観マネジメント研究科の嶽山洋志氏の3名をパネラーとして招きました。

災害直後にはボランティアとして「寄り添うこと」が大切であり、人が集まってくる場の存在とそこで人と触れ合うことが必要であり、キャンプでの人と会話ができる、人と向き

合うことができるというキャンプの持つ力が、まさに被災の現場や避難所等では欠かせないものとなっているとのことでした。また、寄り添うシステムのなかで、子ども一人ひとりとの関わり方として、その子に（その子の気持ちに）どう触れ合うのか学習することでそこに関わる人も育つことになり、人と人が繋がるきっかけにもなっていて、防災を考える際にも地域づくり、人とかがわれる場づくりとして取り組むことでキャンプとつながってくることを確認されました。

シンポジウム以外のイベントとして、プレイベントは「見て、聞いて、考えて！これからの野外活動」のポスターセッションで、関西エリアのキャンプ協会、キャンプ団体、淡路青少年交流の家から実践報告がありました。研究・実践事例発表は、野外活動・キャンプの研究発表（7件）、実践報告（6件）が大学生から若い研究者、中堅・ベテランの実践者などが日頃の研究・実践活動を紹介し、質疑応答も活発に行われました。

関連団体情報

あなたのキャンプや活動を紹介してください！

「第6回アジア・オセアニア・キャンプ大会」発表者募集

主催：公益社団法人日本キャンプ協会

共催：独立行政法人国立青少年教育振興機構

日程：2016年10月28日（金）～11月1日（月）

会場：国立オリンピック記念青少年総合センター（東京都）

アジア・オセアニア・キャンプ大会は、世界のキャンプ関係者の国際ネットワークである国際キャンプ連盟の姉妹組織であるアジア・オセアニア・キャンプ連盟の事業として加盟国が実施するものです。アジア・オセアニア地域はもちろん、世界中のキャンプ関係者が集まり、交流を深めるとともに、よりよいキャンプの実現に役立つ最新情報の交換を行います。現在発表者を募集しています。発表の種類は「研究発表」「実践報告」「ワークショップ」の3つです。どなたでも発表できます。たくさんのご応募をお待ちしています。

【発表申込締切：2016年5月16日（月）】

詳細・お申し込み方法 <http://www.aocc2016.camping.or.jp/japanese/>



日本野外教育学会